

10

西部ナイジェリアにおける食糧生産

しま だ しゅう へい
島 田 周 平

はじめに【一部略】

I 研究対象地域【一部略】

II ココアベルト【一部略】

III 西部ナイジェリアにおける食糧生産

【一部略】

おわりに【一部略】

出典 『アフリカの食糧問題と農民』

細見真也編 研究参考資料262

アジア經濟研究所 1978年 第4章

はじめに

ナイジェリアは、1960年代まで国内の需要を満たすに十分な食糧を伝統的農法内で生産することができ、食糧不足という問題に直面するということになかったと言われている。ところが60年代後半から70年代に入り、ビアフラ戦争(1967~70年)と旱魃(1970~73年)といった二つの社会的、自然的な大打撃を蒙ったこともあって、急速に食糧輸入量が増大し(第1表【略】)、これが政府ばかりではなく、農業問題研究者にも広く食糧不足を意識させることになった⁽¹⁾。もともとナイジェリアの農業は、技術水準が低く粗放的で、しかも伝統的な土地保有制度が強く残存していることも加わり、生産性の点で限界にきているとよく指摘されてきた。そこへ上記の二つのマイナス要因が作用

して、食糧不足が顕在化したというわけである⁽²⁾。

【中略】

筆者は先に、1960年代末までの南部ナイジェリアの食糧生産増大が、伝統的な耕作方法の枠内での耕作地面積の拡大はもちろんのこと、通常考えられている以上に土地生産性増大によっても支えられてきたことを明らかにした⁽³⁾。しかしそこでは1960年代末から1970年代に入って顕在化してきたナイジェリアの食糧不足化が、伝統的な耕作方法内での食糧生産自体の限界性によるものであろうことは示唆しておいたが、ナイジェリアにおける農業生産のもう一つの大きな柱である輸出換金作物生産との関係にはまったくふれていなかった。さらに南部ナイジェリア内での食糧生産の地域的差異——これも1960年代末までの食糧生産増大を支えてきた主要なメカニズムの一つと考える——についても言及していなかった。そこで本稿では、主として1950年代、60年代に焦点を合わせ、地域としては重要な輸出換金作物であるココアを生産している西部ナイジェリアをとりあげ、そこにおける食糧生産を、(1)輸出換金作物生産との関連でとらえ、さらに、(2)食糧生産の地域的分化といった側面からも分析する。そしてそれによって、1960年代以前のナイジェリアの食糧生産の一側面を明らかにしたいと考える。

I 研究対象地域

本稿でとりあげる地域は、ココアベルトのある西部ナイジェリアである⁽⁴⁾。この地域を選んだ理由は、ナイジェリアにおける食糧生産構造、とくにその急速な生産増大メカニズムを解明する場合に、この地域が最も明確な答を用意してくれると考えたからである。西部ナイジェリアは人口増加が著しかったばかりでなく、19世紀末に導入されたココアの普及も著しかった(第2表、第1図)ために、北部、西部、東部といった地域別にみた場合、ナイジェリア国内でも食糧自給が最も困難な地域であったと考えられる。ココア栽培に関

第2表 ナイジェリアの人口増加

(単位: 100万人)

	1952/53年 ²⁾	1963年 ²⁾	1973年 ³⁾
西部州 ¹⁾	4.86	10.93	11.39
中西部州	1.49	2.54	3.24
北部諸州	16.84	29.84	51.38
東部諸州	7.22	12.39	13.75
合 計	30.41	55.66	79.76

(注) 1) ラゴス州を含む。

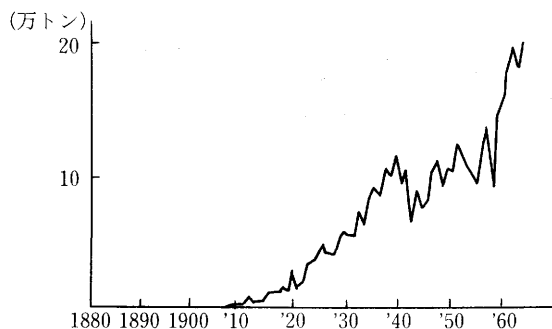
2) 1952/53年センサスは過小評価であり、1963年センサスは過大評価であるといわれている。

Gleave, M.B. and H.P. White, "Population Density and Agricultural System in West Africa," M.F. Thomas & G.W. Whittington ed., *Environment and Land Use in Africa*, London, Methuen, 1969, pp. 273-300.

3) 1975年7月29日のクーデターで成立したムリタラ・モハメド(翌1976年2月13日のクーデター事件で殺害された)新政権は、このセンサスの暫定結果を破棄すると宣言した。このセンサス結果に対しては、北部諸州の人口が特に著しく水増しされているという批判が強く出された。

(出所) Nigeria, Federal Office of Statistics, *Annual Abstract of Statistics 1970*, Lagos, 1971, p. 14および1973年の暫定結果は, *Daily Times*, Lagos, 9 May 1974.

第1図 ココア輸出量

(出所) Helleiner, Gerald, K., *Peasant agriculture, government, and economic growth in Nigeria*, Homewood, Richard D. Irwin, 1966の中の統計付録, 表IV-A-8より作成。

第3表 農業経営形態別農家比率(西部ナイジェリア)(1964/65年)

畑作物と樹木作物 ¹⁾ の両方を同時に栽培している農家	23.34%
畑作物だけを栽培している農家	60.43
樹木作物だけを栽培している農家	16.23

(注) 1) ここでいう樹木作物 (tree crops) はココアと考えるとほぼさしつかえない。

(出所) Nigeria, Federal Office of Statistics, *Rural Economic Survey of Nigeria; Farm Survey 1964/65*, Lagos, 1966, p. 15.

第4表 土地利用形態 (西部ナイジェリア) (1958/59年)

土地利用形態	面積 (エーカー)	面積比率 (%)
畑 地	1,482	5.8
樹 木 作 物 畑	1,176	4.6
保 護 林	4,635	18.2
非 農 業 用 地	187	0.7
そ の 他	18,066	70.7
合 計	25,546	100.0

(出所) Oluwasanmi, H.A., *Agriculture and Nigerian Economic Development*, Ibadan, Oxford Univ. Press, 1966, p. 225.

して言えば、全農家戸数に占めるココア栽培農家戸数の比率は1964/65年の調査では約40%にも達していたし(第3表)、1958/59年の調査でも樹木作物 (tree crops) 栽培地の面積はその他の畑地の面積の約8割にも達していたことが明らかにされている(第4表)。【中略】

したがってこのような特殊性をもつ西部ナイジェリアは、食糧作物栽培と換金作物栽培との両立の問題や、オニ (S.A. Oni) あるいはファモリヨ (S. Famoriyo) が述べているように、ナイジェリアでは本当に1960年代まで国内の需要を満たすのに十分な食糧を伝統的に生産することができ、食糧不足という問題に直面することがなかった⁽²⁾のかどうかといった点を分析する場合に、他の北部ナイジェリアや東部ナイジェリアを分析する場合より、より明確な形で解答を得ることができると思われる。

もちろん、このように西部ナイジェリアだけを分析対象地域としてとりあげ、それによってナイジェリア全体の食糧生産に関する問題を議論するということには一定の限界がある。というのは、ナイジェリアの北部、西部、東部の各地域は、少なくとも独立前後の60年代までは自然環境、社会組織、歴史、農業経営方式等の点でそれぞれの特異性を保持しており、しかもある程度相互に独立性を保っていたと考えられるからである。したがって本稿で明らかにする西部ナイジェリアにおける食糧生産の分析結果も、そのままの形でナイジェリア全体の食糧生産構造の一つの縮図と考えることはできない。少なくともナイジェリア全体の食糧生産構造を分析する場合は、旧北部州、旧西部州、旧東部州といった地域ごとの分析が最初に必要であり、そのうえで総合的に理解するということが手続上必要である。この意味で、本稿における分析は、ナイジェリアの食糧生産の問題を国民経済レベルで把握する前の大地域レベルでの分析であるといえる。

なお本稿では利用できる統計上の問題から、分析する最小単位は県 (Province)、郡 (Division) および大都市地域 (たとえばイバダン地方) とする。

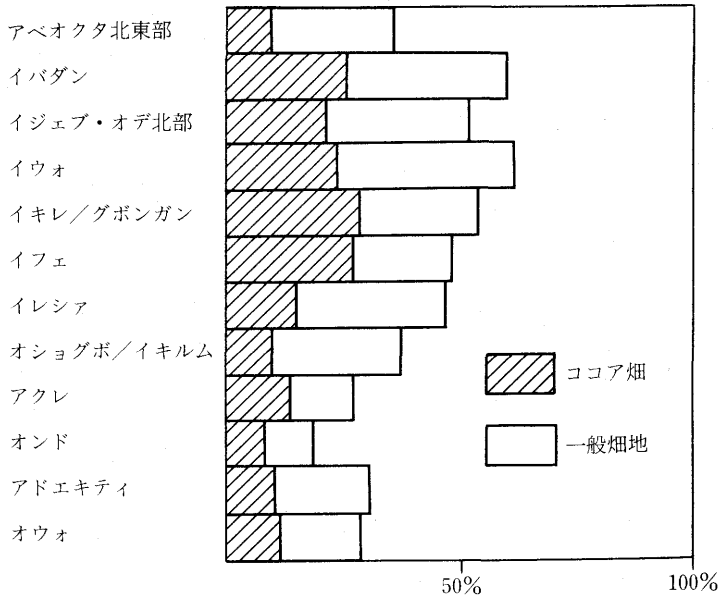
II ココアベルト

西部ナイジェリアの食糧生産について述べる前に、土地・労働力の点で食糧生産と強い競合関係にあったココア栽培について述べておきたい。

(1) 地域的広がり

第3図は西部ナイジェリアの主要都市地域別の土地利用状況を示すものである⁽¹⁾。これをみるとイバダン (Ibadan)、イジェブ・オデ北部 (Ijebu Ode N.)、イウォ (Iwo)、イキレ／グボンガン (Gbongan)、イフェ (Ife) などの諸都市地域では、総面積の実に20%以上がココア畑にあてられていることがわ

第3図 西部ナイジェリアの主要都市地域における土地利用状況
(総面積に対するパーセント表示)



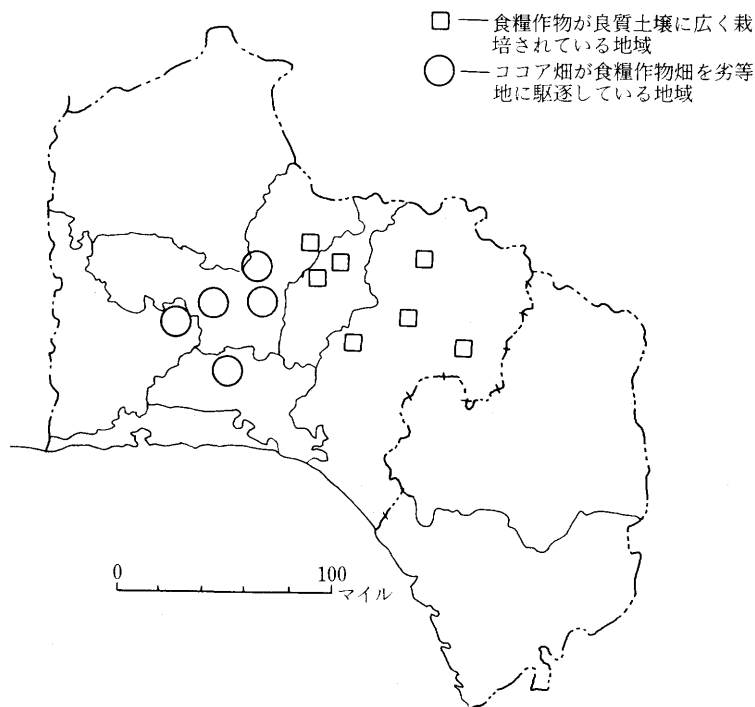
(注) この図に示されているココア畑、食糧作物畑（一般畑地）の面積は実際より大きすぎるきらいがある。これは被調査地域が都市部周辺に偏っているためかもしれない。本稿ではこの図からココア畑と食糧作物畑の面積比をみるだけにする。

(出所) Smythe, A.J. and R.F. Montgomery, *Soil and Land Use in Central Western Nigeria*, Ibadan, Government Printer, 1962, p. 198 ff.

かる。その他の都市も、アベオクタ (Abeokuta)、オショグボ／イキルム (Oshogbo/Ikirum)、オンド (Ondo) を除きすべて10%を超えている。もちろん全耕地面積に占めるココア畑の面積比は非常に高い。

いま、食糧作物畑とココア畑との比をとってみると、前者が後者の2倍以上の地域は、アベオクタ北東部、イレシヤ (Ilesha)、オショグボ／イキルム、アドエキティ (Ado Ekiti) のみである (第4図【略】)。これらは後述するが、ココアベルトへの食糧供給地域である。これに対し、イバダン、イジェブ・

第5図 ココア畑の拡大と食糧作物畑の退潮



(出所) Güsten, R., *Studies in the Staple Food Economy of Western Nigeria*, München, Weltforum Verlag, 1968, pp. 41-42.

オデ、イウォ、イキレ／グボンガンなどの地域は、食糧作物畑がココアによって良質土壤地域を追われ、より地力の低い土地で栽培されている地域であると言われている（第5図）。これは、ココア栽培面積の大きい地域とも一致している。ココアベルトの中核地域を形成している地域である。

(2) ココア栽培の発展過程

西部ナイジェリアでココア栽培が本格的に始まったのは1880年代である。

最も早くココア栽培が行なわれたのは、イバダン、アベオクタおよびラゴス近郊である。そしてオヨは20世紀に入ってから、イバダン南東部のイジェブやオンドでは1910年代以降になってから栽培が本格的になってきた。

第5表は各県別のココア作付面積の増加量を示している。これをみるとイバダンは、ココア栽培開始時期もココア畑拡大最盛期もともに早く、これとは対照的にイジェブ、オンドは両方ともイバダンに10～20年遅れていることがわかる。ここではイバダンとオンドを、それぞれココア栽培が早く進展した地域とそれが遅かった地域の事例としてとりあげ、その発展過程を概観してみる。この場合特に、後述する食糧生産と関連があると思われる範囲でのみ、ココア栽培開始、普及時期の遅速を問題とする。

第5表 各県別ココアの新規作付面積（5年間ごとの平均値）
（単位：エーカー）

年 \ 県	イバダン	オヨ	アベオクタ	イジェブ	コロニー	オンド
1890—1900年	24	0	14	0	3	0
1901—1905	123	11	67	0	30	0
1906—1910	607	138	178	26	31	21
1911—1915	2,219	363	411	41	33	74
1916—1920	6,185	2,779	1,262	149	206	293
1921—1925	6,120	4,188	2,113	455	121	1,131
1926—1930	13,782	9,663	6,095	2,201	167	4,120
1931—1935	7,337	4,231	5,887	1,406	90	26,288
1936—1940	5,679	4,278	5,001	1,273	104	27,677
1941—1945	1,669	1,603	1,102	266	22	19,388
1946—1950	487	868	949	188	19	4,681
1951—1955	123	832	948	170	80	1,777
1956—1957	279	308	500	144	0	1,779

（出所） Berry, S.S., "Cocoa in Western Nigeria, 1890-1940; a Study of an Innovation in a Developing Economy," Univ. of Michigan, Ph. D. diss., 1967, pp. 43-44 (Unpublished) より作成。

1. イバダンの例

ココア栽培の揺籃期ともいうべき時期(1800~1910年代)にイバダンで早くココア栽培が広がった理由については未だよくわかっていない。現在のところ考えられている理由は、(1)ヨルバランド(Yoruba land)における16年戦争の終焉(1893年)による影響がイバダンで最も大きかったこと、そして、(2)鉄道や道路網の発達が他地域に比べ早かったことなどである⁽²⁾。

ところでイバダンの町はその創立が1830年と他のヨルバ地方の都市に比べ比較的新しく、しかもオヨ(Oyo)帝国の成立によってイフェ、エグバ(Egba)、イジェブ等の地を逃れてきた避難民と戦士たちによって作られた町である。したがって他のヨルバタウン(ヨルバ地方の諸都市)のようにイレ-イフェ(Ile-Ife)に起源を発する王家の子孫オニ(Oni)が初めから存在しなかった⁽³⁾。したがって、土地は父系親族集団idileが保有し、その集団の各構成員は用益権のみをもっていた。他地域から来たよそ者(alejo)もこのidileの許可を得て土地の用益権を得ることができた。しかしよそ者に対する土地用益権は、通常イシャギ(ishagi)と呼ばれる一時的な贈り物と、イシャコレ(ishakole)と呼ばれる毎年の貢納はもちろん、必要に応じて要請される労働提供の義務遂行および樹木作物の栽培禁止履行を条件にして初めて与えられた⁽⁴⁾。このためこのような状況下ではよそ者(alejo)はココア栽培に着手することができなかった。ココア栽培に乗り出したのは地元のイバダンの農民ないし失業した戦士たちであった。地元の人びとによって栽培されたといっても、ごく初期には自分が耕作している食糧畑へ間作のような形で植え付けられたと考えられる。ココアの植付け場所がすべてヤム畑の畝間であったこと、しかも植付け間隔が3フィートと狭かったことがこれを裏付けている(第6表)。地元の小農ないし失業していた商人や戦士たちが、伝統的な土地保有制度の枠内で、しかも土地利用パターンも急激に変えることなくココア栽培に着手したことがうかがわれる。

第6表 第1代目ココア栽培農民のココア植付け方法

	イバダン	オンド	計
サンプル数	9	18	27
植付け方法			
ココア種子あるいは購入苗木	9	14	23
自分の畑で育てた苗木	—	4	4
植付け場所			
ヤム畑の畝間	9	10	19
ココア用に作られた畑	—	4	4
不 明	—	4	4
植付け間隔			
3フィート	6	6	12
3～6フィート	2	6	8
6フィート以上	—	5	5
不 明	1	1	2

(出所) Berry, S.S., "Cocoa in Western Nigeria……," p. 88.

【中略】

しかし、1930年以降はイバダン地方の状況も異なり、もはや半径10マイル以内ではココア栽培に適当な土地をみつけることはできず、その外側にココア畑を拡張することが必要になってきた⁽⁵⁾。このため、なかにはイバダンを離れて、後述するオンドやイジェブ地方へ移住する者もでてきた。イジェブやオンド地方にある、イバダン出身者が開いたといわれる村々は、これら30年代以降の移住農民によって作られたものである(第7表【略】)。

2. オンドの例

オンドの中心都市オデーオンド(Ode-Ondo)は、ヨルバ族の共通祖先であると言われてているオドウドゥワ(Oduduwa)に系譜をたどることができる王オシエマウェ(Oshemawe, オンドの王Oba of Ondo)が住んでいる。そしてこのオデーオンドの近郊にある中小の町々には、もともとこの地にいた伝統的

統治者オロジャ (Oloja) が3人おり、彼らは独自の首長団 (Chiefs) をもっていた。しかしオシエマウェと彼の首長団は、オデーオンドの近郊の町はオデーオンドからの移住民が作ったものであるから、オシエマウェが領有権を持つと主張した。オロジャと彼の首長団は、彼らこそそれらの町の地元民であるのかかわらず、このオシエマウェの領有権を認めざるをえなかった。19世紀の末にオデーオンドの南部にまだ広く残っていた未利用地も、オシエマウェの領地であると考えられていた⁽⁶⁾。

オンドではこのようにイバダンとは異なる歴史的背景をもっていたうえに、前述したようにココア栽培の普及がイバダンよりも10～20年遅れていたので、イバダンとは違った形でココア栽培は進展することとなった。

第3図からもわかるとおりオンド地方はイバダン地方に比べ未利用地が豊富にあった。この豊富な土地を求めて、オンド地方の人びとがココア栽培に乗り出す以前の1920年代から、ヨルバランド北部やイバダンの人びとが、初めからココア栽培を目的にオンド地方に移住してきた。したがって、ココアの木の新植付けは、既存の食糧作物畑への間植といった形ではなく、初めから外来者による新開地の開墾という形をとることが多かったと考えられる。これらの新開地では、ココアの木 (若木の時期だけ) の間に食糧作物が植え付けられ栽培されるという方法がみられた。この点はココア栽培の先発地域であるイバダンでみられたココア栽培初期の状況とは全く異なっている。ココアの木の新植付け間隔がイバダンにおける3フィートより若干広くなっており (3～6フィートあるいは6フィート以上)、ココアの木に適正な間隔距離⁽⁷⁾により近づいていることも、この後発地域オンドの特徴を示している (第6表参照)。

イバダンや北部ヨルバランドから移住してきた農民たちは、多くの場合賦役なしでイシャコレやイシャギの支払いだけを約して、オシエマウェやその代理人としてのオロジャから土地用益の許可を受けた⁽⁸⁾。彼らは新しいココア畑を開く場合に、地元のオンドの人びとに依存することなく、同郷者や友人の協力を得た。そしていったんココア栽培が軌道に乗ると、この移住ココ

ア農民は、同郷からの新参者の寄宿基地として、家・食事の世話はもとより各種の情報も与える、同郷者中心に作るネットワークの一拠点の役割を担った⁽⁹⁾。そして、自分の畑で無償ないしごく安い手間賃で働いてくれた同郷者が、ココア畑を手に入れ独立する場合には、地主との仲介をしてやったり、ココアの苗木を与えたり、開墾時には労働力の提供もおしなかった。

【中略】

オンド地方ではイバダン地方と違い、オンドの王オシェマウェと移住農民(=ココア農民)との間の土地用益権をめぐる契約条件が純粹経済的なものであったので、ヨルバ族以外の人もココア栽培を行なうことができた⁽¹⁰⁾。一般に土地の用益権を得る場合、賦役はもちろんのこと場合によってはどんな種類のものであれ贈り物の形をとった貢納義務もなかった⁽¹¹⁾。そのうえ、よそ者に対するココア栽培規制もなかったのである⁽¹²⁾。ヨルバ族ではない東部ナイジェリア出身者でココア栽培を行なっている者が、このオンド地方に少数ではあるがみられた(ピアフラ戦争前のことである)という。イバダン地方ではまったくみられないことである。

3. その他のココア栽培地域の例

最後にイバダン、オンド以外の地域におけるココア栽培について概観しておきたい。

(1) アベオクタ(イバダンの西)の例

アベオクタ地方では、ココアの導入時期だけはイバダン地方と同様に早かった。しかしその後のココア栽培地の拡大はイバダン地方でみられたほどの進展をみなかった(第5表参照)。アベオクタ地方、特にその中でも北西の地方では雨量が少なく、ココア栽培に適さなかったのが最大の原因である⁽¹³⁾。しかしこのような自然的制約の他にもアベオクタ地方でココア栽培があまり進展しなかった理由がある。

アベオクタ地方ではイバダン地方におけるよりさらに強く借地畑に対するココア栽培規制が残っていたと言われている。借地畑における栽培作物規制はココアに限らず、アベオクタ地方の一部では多年生作物であるキャッサバの栽培すらあまり好まれず、借地畑にキャッサバを植え付ける場合は地主との間で年貢の再調整交渉が必要であったとさえいう⁽¹⁴⁾。このこともアベオクタ地方でココア栽培があまり進展しなかった理由であると考えられる。そして後述するようにこの地方は、ココアベルトへの食糧供給基地としての性格を強めてくることになった。

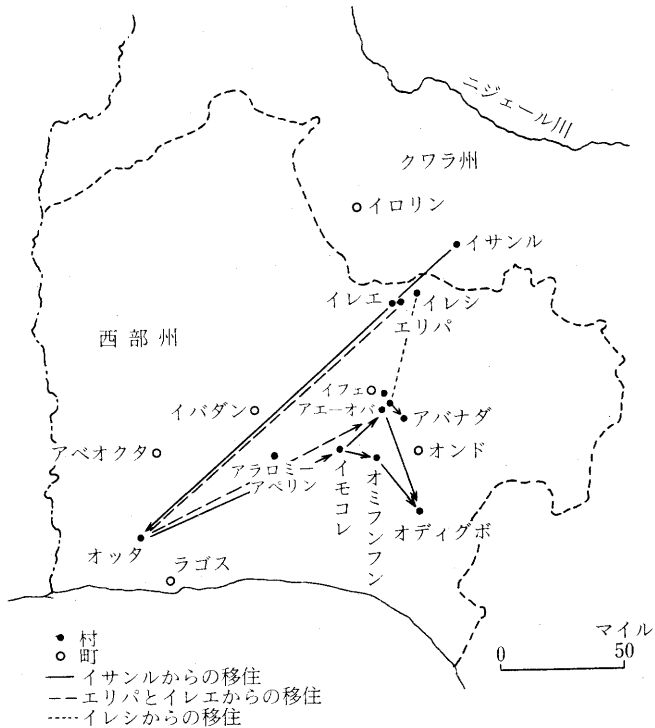
(ロ) イジェブ南部およびコロニー県の例

イジェブ地方では、ヨルバ族の共通祖先であると言われているオドゥドゥワ (Oduduwa) の子オバンタ (Obanta) に系譜をたどることができる各親族集団が彼ら自身の土地 (family land) を保有しており、これを自由に譲渡売却することが可能であった⁽¹⁵⁾。売却する相手がたとえイジェブの地元民でなくとも、イジェブの王アウジャレ (Awujales) の許可を求めることは必要ないとされていた。親族集団の全構成員の同意のもとにその集団の長 (olori ebi) が契約すれば土地を譲渡売却することができたのである⁽¹⁶⁾。もっとも一般には、25～50年といった長期の借地契約で小作人に貸し与えられることが多かったという。そしてこの借地契約の場合、アベオクタ地方で顕著にみられたココア栽培規制は、この地方ではあまりみられなかった。借地を他人にまた貸しする例も少なからずみられたという。この借地のまた貸しはコロニー県では一層普及しており、ここではさらに地主の多くが不在地主化しているといわれている。そして一方では小作人の方でも、経営耕地面積を拡大し、なかには40～50エーカーにも及ぶ耕地を耕しあるいは他人にまた貸ししている者すら出現するようになった⁽¹⁷⁾。

このようにココアの栽培規制が弱かった点でもまた土地譲渡が自由に行なわれていた点でもイジェブ地方とコロニー地方は、ココア栽培を受け入れる社会的条件は他地域よりもよかったといえる。しかし、イジェブ地方の南部とコロニー県は土壌がココア栽培に適さず⁽¹⁸⁾、それに加え未利用地も少な

かったために、北部イジェブ地方を除き、ココア栽培はあまり進展しなかった。1930年代までにイジェブ地方ではココア栽培に適する土地が消滅し、イバダンやヨルバランド北部からこの地に来ていた移住農民たちは、オンド、イフェ、アゴーオウン(Ago-Own)などの土地へ再び移動してゆかざるをえな

第8図 移住の例



(出所) Berry, S.S., *op. cit.*, p. 68.

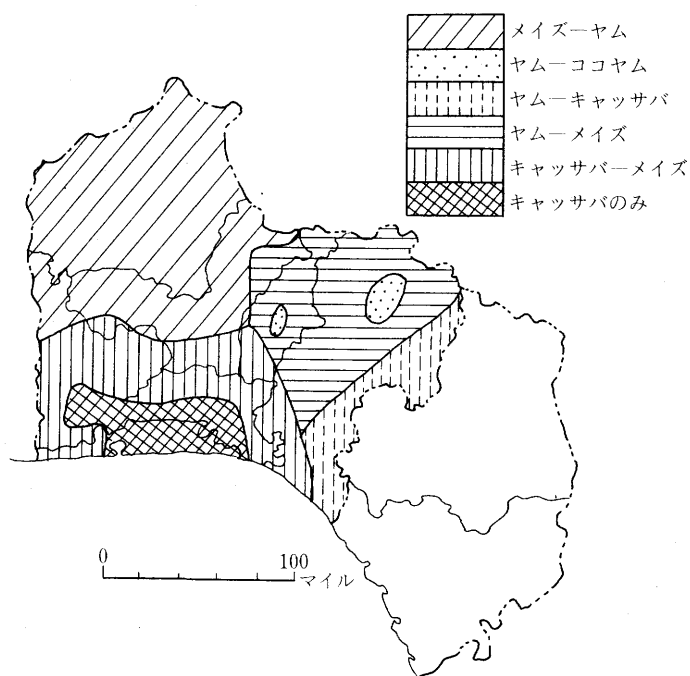
かった (第8図)。

III 西部ナイジェリアにおける食糧生産

1. 栽培作物の地域的分布

第9図は西部州 (Western State) における主要食糧作物の栽培状況を示し

第9図 主要栽培作物 (1963~66年)



(出所) Agboola, S.A., "Patterns of Food Crop Production in South-Western Nigeria," *The Nigerian Geographical Journal*, Vol. 11, No. 2 (1968), p. 146.

ている。コロニー県を中心に沿岸部ではキャッサバが、北東部ではヤムが、そして北西部ではメイズ（とうもろこし）がそれぞれ主要な食糧作物として栽培されていることがわかる。ちょうど東西に延びるココアベルトが、キャッサバとヤム・メイズ地帯との境界域をなしているといえる。

キャッサバの栽培地域が大都市の多いココアベルト以南の地域に広がっていることは興味深い。17～18世紀に西部ナイジェリアに持ち込まれたと考えられているキャッサバが、ヤム芋文化圏の中に浸透していく経路は、おそらく二つあったと考えられる。つまり海岸部から陸地へ、都市部から農村部へという二つの経路である。今でも農村部にはキャッサバを“ラゴスの食物”とか“旅行用の食物”とか言って日常はあまり口にしない傾向がある⁽¹⁾という事実や、都市住民の方が農村部の農民よりもキャッサバの消費量が大きいという事実（第8表）は、外来作物キャッサバの特殊性を表わしている。

第8表 都市部と農村部における作物別消費割合（％）

	オンド県* ¹ 農村部	オンド県都市部* ² (オンド／アク レ／オウオ)	オヨ県* ¹ 農村部	オヨ県都市部* ³ (オショグボ／ イフェ／イレシャ)
ガ リ ¹⁾	16.3	18.3	10.5	13.5
キャッサバの粉	0.6	0.7	0.5	1.0
ヤ ム	39.4	21.7	25.6	18.3
ヤ ム の 粉	0.6	4.7	19.3	10.5
メ イ ズ	2.8	10.7	1.0	16.0
豆 類	3.1	18.8	8.0	18.8
そ の 他	37.2	25.1	35.1	21.9
主 食 作 物 全 体	100.0	100.0	100.0	100.0

(注) 1) ガリはキャッサバを水で灰汁（あく）抜きしたあと、皮をむいておろしたあと重しの下で発酵させて作る。

(出所) *1 Nigeria, Federal Office of Statistics, *Rural Economic Survey of Nigeria 1965/66; Rural Consumption Enquiry Food Items, Western Nigeria*, Lagos, 1966, TABLE IIIA, IIID.

*2 ———, *Urban Consumer Surveys in Nigeria: Report on Enquiries into the Income and Expenditure Patterns of Lower and Middle Income Households at ONDO/AKURE/OWO, 1964/65*, Lagos, 1966, p. 80.

*3 ———, *Urban Consumer Surveys in Nigeria: Report on Enquiries into the Income and Expenditure Patterns of Lower and Middle Income Households at Oshogbo/Ife/Ilesha, 1963/64*, Lagos, 1966, p. 26.

キャッサバは最初ヤムの畑の畝^{うねみぞ}に間植されるか、あるいは休閑地に植え付けられるかどちらかの方法でヤム栽培地帯に浸透してきた。そしてやがて、キャッサバは痩せた土地でも十分育成し、ヤムに匹敵する収量を得ることができ、そのうえ除草などの手入れはいらず、しかも常時必要に応じて掘りおこせるという有用性をもつことがわかると、人口密度が高い地域や都市近郊農村では特によろこばれ、栽培面積が拡大していった⁽²⁾。キャッサバは多年性作物であるので、一般に永年作物栽培をきらい伝統的土地保有制度が強く残存していた地域では、キャッサバの栽培は抵抗を受けたものと考えられる。このこともあってキャッサバの栽培は、都市化が進み、伝統的土地保有制度の崩壊も比較的早く進行していた沿岸部で早く進展したというわけである。もちろんキャッサバの栽培地は、現在もココアベルトの北部へと延びつづけている。

一方ココアベルトの北部で広く栽培されているメイズも、17～18世紀に西アフリカにもたらされたとされている外来作物である⁽³⁾。もちろんココアベルト南部のキャッサバ主導型栽培地域でもメイズは広く栽培されている。メイズがこのように広い地域にわたって栽培されているのは、ヤム畑への間植作物として適していたからであると考えられる。キャッサバが、同じ芋類のヤムとの競合に正面から打ち勝っていったのに対し、メイズは、ヤムとキャッサバの両方とうまく共存して栽培地を拡大してきたといえる。

2. 西部ナイジェリアにおける食糧の地域間移動【略】

3. 食糧作物栽培の担い手

ガレッティ他 (R. Galletti et al.)⁽⁵⁾は、ココアベルトが食糧移入地域になっているとし、その原因を、ココア導入による食糧作物の減産に求めた。これに対しギュステン (R. Güsten) やベリー (S.S. Berry) は⁽⁶⁾、ココアベルトへ他地域から多くの食糧移入があるのは、ココアベルト全体で食糧作物の需要

生産農民とココア栽培農民との分化——一方でよりココア栽培に特化することによって食糧不足をきたす農民がおり、その一方ではこれらの農民に食糧を供給する農民がいるという可能性——を考えている。言葉を換えていえば、ココアベルト内における食糧作物栽培の主たる担い手の形成である。ここではココア栽培の発展過程の項でとりあげたイバダンとオンド地方を再びとりあげ、これらの地域における食糧作物栽培の担い手について若干の考察を行なう。

ところでこのような一地域内における食糧作物の担い手の形成は、いわば

第11表 ココア栽培農家の農業労働力

		人・時間(%)
食糧作物生産	家族労働	36.9
	雇用労働	12.0
	小計	48.9
ココア生産	家族労働	22.1
	雇用労働	29.0
	小計	51.1
	計	100.0

(出所) Galletti, R. and K.D.S. Baldwin, I.O. Dina, *Nigerian Cocoa Farmers; an Economic Survey of Yoruba Cocoa Farming Families*, Oxford, Oxford Univ. Press, 1956, p. 670の付表XXXVIII.

第12表 雇用形態 (聴取り人数)

(単位: 人)

地 域	イ バ ダ ン		オ ン ド	
	1代目	2代目	1代目	2代目
ココア農民				
伝統的契約	31	—	10	—
年 雇	46	64	66%	82
臨時雇	8	30	30	16
その他 (分益小作など)	—	4	—	10
返 答 な し	28	13	13	—

(出所) Berry, Sara S., *Cocoa, Custom and Socioeconomic Change in Rural Western Nigeria*, Oxford, Clarendon Press, 1975, p. 149.

が供給を上回っていたからではなく、ココアベルト内にある多くの都市(イバダン、イジェブ・オデ、イキレ等)での食糧需要が増大したからであると説明した。むしろココアベルト内でも農村部では、ココア栽培は食糧作物生産を犠牲にすることなく進められ、ココアベルト内の都市部への重要な食糧供給基地にすらなっているというわけである。ギュステンの調査では、イバダン農村部やイジェブなどのココアベルト内の地域が、イバダンやラゴスへの重要な食糧基地になっていることが示されている。

しかし、前項【略】でみた食糧の移動調査結果をみると、ガレットティ他の説明ばかりでなく、ココアベルトへの食糧移入をココアベルト内の都市化に求めるギュステンやベリーの説明にも少し疑問が出てくる。ギュステンの説に対しては、はたしてココアベルト全体が食糧移入地域となったのかどうかという点が不明であり、ガレットティやベリーの説に対しては、ココアベルト内の農村部が、急速なココア導入にかかわらずどうして食糧作物の生産水準を維持し、そのうえさらに都市部へ供給するほどの食糧を生産することができたのかといった点が疑問である。このうち後者の点に関しては、ココアベルトの農村部でも、食糧の一部を他地域からの移入にたよっていることが推察される。1966年に行なわれたギュステンの調査では、イバダン、オシュン、イフェ、イレシャ等の各地域の農村部で、1日当りの推定食糧消費量のうち10%をそれらの地域以外の地域から移入していることが明らかにされている⁽⁷⁾。農村部といえどもココアベルト内では食糧の一部を移入にたよらざるをえなかったのである。

以上の点を考えると、ココアベルトではココア生産の拡大と都市化の進展によって、(1)都市部では食糧不足が生じココアベルトの内外を問わず農村地域からの食糧移入を不可欠とするようになり、一方、(2)ココアベルトの農村部では、ココアベルト内の大都市へ食糧を供給する能力をもつと同時に少なからぬ量の食糧を他地域からの移入に依存しているといった一見矛盾した姿が描き出せる。ココアベルト内の農村部でみられるこのような一見矛盾した食糧の移出入動向を解く鍵として、筆者はココアベルト内の農村部での食糧

地域内での分業化の傾向を示すものといえるが、このような地域内での分業化とは違う次元でも一種の分業化がみられる。それは前項で明らかにしたココアベルトの近接地域の食糧供給基地化にみられる、ココア栽培地域と食糧栽培・供給地域との間の地域間分業化の傾向である。ここではこの地域間分業＝地域分化⁽⁸⁾の例として、ココアベルトの近接地域の食糧供給基地化を取りあげる。

(1) イバダン地方における域内分業

イバダン地方では父系親族集団イディレ(idile)の土地に対する権限が強く残っており、このためよそ者(alejo)は土地用益権の固定化をもたらしやすいココア栽培が許されなかった。そしてココア栽培に乗り出したのはイバダンの地元民であったことは前述したとおりである。

自分の食糧作物栽培畑へのココアの苗木の間植は、少なくとも初期の間は、土地、労働力の双方の点でさしたる無理はなかったと考えられる。しかしココアの木が育成し大きくなって、食糧作物畑がココア畑に完全に転換される3～4年後になると、ココア栽培はそれ以前とは違った段階に入る。さらにココアの木が成熟し収穫可能になると、必要労働力が増加して少しずつ食糧生産との両立が難しい状況に入る。すでにココア栽培地の拡大が限界にきていた50年代初期の調査からこの点をみてみよう。

第11表はガレットィ他の調査結果である。ココア生産のために投入されている労働力の50%以上が賃金労働にたよっている。これに対し、食糧作物生産に要する労働力の約4分の3は家族労働力で賄われており、残りの4分の1が賃金労働力に依存している。つまり、食糧生産は主として家族労働で行ない、ココア生産はその過半部分を家族労働以外に依存しているわけである。

ではこの賃金労働の内容はどうなっているのだろうか。第12表はベリーが60年代に行なった聴取調査の結果である。これによれば、イバダン地方ではココア栽培初期(ココア栽培1代目)には、伝統的契約形態が約3分の1を占めている。つまり、同じイバダン地元民の間での賃金雇用が多かったとい

第13表 移住農民の農業形態

ヨルバ族の移住農民		イボ族の移住農民		
食糧作物栽培のみ	食糧作物栽培＋ 換金作物栽培	食糧作物栽培のみ	農業労働一般	食糧作物＋ 換金作物栽培
38.6 (%)	28.8 (%)	48.7 (%)	23.8 (%)	2.1 (%)

(出所) Udo, R.K., *Migrant Tenant Farmers of Nigeria: A Geographical Study of Rural Migrations in Nigeria*, Lagos, African Univ. Press, 1975, p. 48.

うことである。しかしココア農民2代目の時期になると、年雇と臨時契約が多くなってきている。臨時契約には、日雇いと出来高払い方式の二つの形態があり、これは地元イバダンの人および北部ナイジェリアからの出稼ぎ農民がよく行なう契約方法である。ココア農民の1代目、2代目を問わず多い契約方法は年雇である。この年雇は、ヨルバ族以外の（もちろんイバダンの地元民ではない）イボ族などの東部ナイジェリア出身の農民たちがよくとる契約方法である。彼らはヨルバランドには進出拠点を持っていなかったため、賃金水準は低いものの生活上の安全が保障される年雇という契約形態を好むのである。同じ非ヨルバ族といっても、北部ナイジェリアからの出稼ぎ農民が臨時雇いという契約形態をとっているのは、彼らはよそ者といえども西部ナイジェリアの各地に彼らの進出拠点をもっており、一応生活上の安全は保障されていたからである。

1950年代、60年代の雇用形態は、このココア農民第2世代の雇用形態に近いものと考えられる。雇用する方のココア栽培農民にしてみれば、日雇いや出来高払いは年雇に比べ賃金水準が高く、しかもその日のうちあるいは数日のうち（あるいは契約した仕事が終わる次第）に即座に現金で労賃を支払うことが必要であるから、1年中いつでもこのような形で雇用労働力を利用できるというわけではない。このような雇用形態は、雇用主が現金支払能力をもっている主としてココア収穫時に雇用することが多い。これに対し年雇の方は、日々の雑用や食糧作物の手入れ、収穫等の作業に利用されることが多い。このことは第13表をみても明らかである。年雇の契約形態をとることの多いイ

ボ族の移住農民は、その約50%近くが食糧作物栽培だけに従事している。一般農業労働も含めれば70%以上になる。これに対し換金作物栽培を行なっている者は2.1%ときわめて少ない。これは、ヨルバ族の移住農民の約30%の者が換金作物栽培に従事しているのと対照的である。

以上のことを整理してみよう。イバダン地方では、地元民がココア栽培に従事し、不足する労働力の確保には2通りの方法をとっていた。一つには、イボ族に代表される東部ナイジェリア出身の移住農民を年雇とする方法であり、もう一つは地元のイバダンの農業労働者あるいは北部ナイジェリアのハウサ族の出稼ぎ農民を、必要に応じて日雇いないし出来高払い契約で雇う方法である。このうち前者の年雇の方は、主として食糧生産労働に従事させ、後者の方はココア栽培に利用するといった使いわけを行なっていたものと考えられる。賃金水準の低い年雇形態が安定的に存在している背景には、東部ナイジェリアから移住してきたイボ族が、西部ナイジェリアでは社会的に不安定な地位におかれているという特殊な社会的状況がある。

(2) オンド地方における域内分業

オンド地方では主として移住農民がココア栽培を開始したことは前述のとおりである。したがって食糧生産の担い手もイバダンの場合と大きく異なっていた。まだ未利用地が広く残っていた1920年代以前からすでに北部ヨルバランドやイバダン地方から農民が移住し、彼らがココア栽培を始めたのである。この農民の移住は、対全人口比から言っても無視できないほど大きいものであった。一般にナイジェリアにおける国内の人口移動パターンは、1950年代を前後に農村開拓型から都市化型に変化したといわれている⁽⁹⁾。しかし、ココアベルトに関するかぎり50年代以降も農村開拓型、つまり都市部から農村部への人口移動現象がみられたのである⁽¹⁰⁾。

ところでこのようにココア栽培を目的に移住してきた農民たちに比べ、オンド地方の地元農民は、ココア栽培に着手することは少なく、伝統的な食糧作物栽培を続ける者が多かったと考えられる。ココアの伝播それ自体は、オ

ンド地方でもイバダンやイフェ地方とほぼ同じぐらいに早かったのであるが、オンド地方では移住ココア栽培農民が来る以前にはほとんど地元民によるココア栽培はみられなかった⁽¹¹⁾。イバダン地方や北部ヨルバランドから移住してきたココア栽培農民の食糧生産とはいえば、彼らは自給していたものと考えられる⁽¹²⁾。ココア栽培が主たる目的で移住してきた農民が、彼らの食糧をも自給しえたメカニズムは次のようなものであったと考えられる。

オンド地方の新開地を求めて移動してきた農民たちは、ココア畑を開く時にココアの苗木と苗木の間にyam芋、メイズ、キャッサバなどの食糧作物を間植した。したがってココア畑が拡大されつつある間には同様の方法で十分な食糧生産が可能であった。少なくとも栽培地面積上の問題はなかった。問題はむしろココア畑の開墾＋食糧作物栽培に必要な多大な労働力の確保にあった。移住農民はこの問題を、同郷の村の若年労働力に依存することで解決していた⁽¹³⁾。多くの移住ココア農民からの聴取調査で、最初に同郷人ないし知人のココア畑で無償ないし若干の賃金を得て働いたことがあるという経験が明らかにされている。このことは多くの移住農民が自分のココア畑を持つ前は、同郷出身者の先行ココア農民の畑で貴重な若年労働力として働いていたことを意味している。先行ココア農民は、後進のいわばココア農民予備軍に対し、家屋、農具、食事を提供するかわりに、無償ないしそれに近い形⁽¹⁴⁾でココア畑、食糧作物畑の区別なく労働力を提供してもらったのである。そのかわり後者が新しくココア畑を開いて独立するときには、地主との契約、土地の選定、開墾の手伝いなど、あらゆる努力・協力をおしななかった。こうして移住農民は、ヒル (P. Hill) がガーナのアクワピン (Akwapim) およびアキム・アブアクワ (Akim Abuakwa) の調査で明らかにした、ココア畑を共同で購入するための団体 (Company) ⁽¹⁵⁾とはまったく異なる方法できわめて強く共同体的な絆に依存することによってココア畑を拡大していったのである。

ところが、食糧作物をココア畑に間植しているかぎり、ココア畑の地域的拡大の低下と急速な人口流入によっていずれは食糧自給ができなくなることは自明のことである。オンド地方でも1920年代に著しい食糧価格の上昇⁽¹⁶⁾が

あったようで、この地方における食糧需給バランスに大きな変化が起きていたことを想像させる。この食糧価格の上昇に対処するため、オンドの王オシェマウェ (Oshemawe) は、ヤムの栽培が得意とされているイグビラ族 (Igbirra)⁽¹⁷⁾ を地代無償でオンドの地に誘致するといったことまで行なっている。

(3) 地域分化の例——北部ヨルバランド

北部ヨルバランド (西部ナイジェリアの北辺部と北部ナイジェリアの南端部) では降水量が少ないという自然的制約によってココア栽培は進展しなかった。このためココアベルトの北に位置するこの地域は、ココアベルトへの食糧供給地、労働力供給地としての役割を担うことになった。この項の最初にも述べたように、ココアベルトでは農村部においても自家消費した食糧のうち10%は他地域からきた食糧に依存していた。つまりココアベルト全体では、都市化とココア栽培の拡大とによって都市部と農村部とを問わず食糧と労働力を外部地域に存在せざるをえなくなってきたのである。これらのココアベルトにおける食糧と労働力の不足分を補ったのが、ここで述べる北部ヨルバランドをはじめとするココアベルト近接地域である。

北部ヨルバランドからココアベルトへの食糧移出に関しては第9表【略】に示したイバダンの町への食糧流入量調査しか現在のところ利用できない。イバダンの町への食糧移入=ココアベルトへの食糧移入と考えることはもちろんできないことだが、ココアベルトの最大の集積地であり分散地でもあるイバダンへの食糧移入量を見ることによって、他地域からココアベルトに運び込まれる食糧作物の種類、量に関する大よその傾向は把握できるものと考えられる。この第9表【略】によれば、北部ヨルバランドからココアベルトの中心地イバダンに移出される主な食糧作物は、ヤム、メイズ、キャッサバである。北部ヨルバランド内でもココアベルトに最も近いオヨ郡が最大の食糧供給地になっている。

ところで、この北部ヨルバランドの地域は、ココアベルトに対する食糧供給地としてはもとより労働力供給地としても重要である。というのは、ココ

ア栽培を目的に1920年代以降にオンド地方へ移動してきた移住ココア農民の一部は、この北部ヨルバランドの人びとだったからである。前述したようにオンド地方への人口移動は、ココアベルト内の都市部（イバデン、イジェブ・オデ、イフェ）からの人口移動と、ココアベルト外の農村部（北部ヨルバランド）からのものであった。

北部ヨルバランドがココアベルトへの食糧供給地としての性格を強めつつあったことと、この地域からココア農民の流出をみるにいたったことは密接な関係にある。いまこの点を少し明らかにしておこう。それには、この北部ヨルバランドからココアベルトへの移住が、ココアの市場価格が下落していた1920年代後半から30年代前半により一層さかんになった事情を説明するとわかりやすい⁽¹⁸⁾。

北部ヨルバランドの農民は、西部ナイジェリアでココア栽培がさかんになる以前にすでにタバコ栽培を行っており、換金作物生産の経験をもっていた。しかも、この地域を通り路とする北部ナイジェリアのハウサ族のコーラ商人からココアベルトにおけるココア栽培の普及について聞いており、ココア栽培方法に関しても相当の知識をもっていた。そこへこの1920年代後半から30年代前半のココア市場価格下落が起きた。ココアの市場価格下落→買上げ価格の低下に直面して、ココアベルトの多くのココア農民（特にイジェブ県とアベオクタ県のココア農民）はこの時、ココア栽培の一部を放棄し、自給用および若干の販売用のために食糧作物栽培に力を入れた。前述したようにココア栽培農民といえどもその多くは食糧作物栽培を放棄しない小農であったから、ココア生産を一時的に低下させることは容易に行なえた（第14表参照）。このためココアベルトにおける食糧生産量は激増し、食糧作物の価格も大暴落した（第11図【略】）。そしてこの食糧作物の小売市場価格の大暴落が、当時すでにココアベルトへの食糧供給地としての性格を強めていたこの北部ヨルバランドに大打撃を与えた。ココアの買上げ価格が下落したといってもこの時にはココア生産の方が食糧作物生産より相対的に有利であったので、北部ヨルバランドの多くの農民はココア生産に乗り出したという。この地域からコ

第14表 耕作形態別農家経営規模

規模(エーカー)	一般畑作+樹木栽培農家(%)	一般畑作のみの農家(%)	樹木作物栽培のみの農家(%)	規模別比率(%)
~0.25	0.44	5.53	1.10	7.07
0.25~0.50	1.58	13.31	2.89	17.78
0.50~1.00	4.65	15.26	5.58	25.49
1.00~2.50	9.25	18.57	4.68	32.50
2.50~5.00	5.37	6.21	1.53	13.11
5.00~10.00	1.69	1.47	0.45	3.61
10.00~15.00	0.27	0.08	—	0.35
15.00~20.00	0.09	—	—	0.09
20.00~	—	—	—	—
計	23.34	60.43	16.23	100.00

(出所) Nigeria, Federal Office of Statistics, *Rural Economic Survey of Nigeria: Farm Survey 1964/65*, Lagos, 1966, p. 15.

第15表 地域別平均ココア畑面積および耕作地面積

(単位: エーカー)

村 名	イロファ (イロリン県)	アラデ (オンド県)	オルグボ (アベオクタ県)
コ コ ア 畑 面 積	0.04	4.76	1.99
耕 作 地 面 積	3.35	2.73	3.50
休 閑 地 面 積	9.05	9.72	10.02
農 業 所 得 (ボンド・シリリング/年)	74.0	193.7	152.8

(出所) Upton, M., *Agriculture in South-Western Nigeria: A Study of the Relationship between Production and Social Characteristics in Selected Villages*, Reading, Univ. of Reading, 1967, pp. 9, 12, 32.

コアベルトへの移住は50年代、60年代も続いていたわけであるが、この時の移住の動機としては先行移住ココア農民の成功に刺激された面が多分にある。この点は移住ココア農民の労働力調達方法のところで述べたとおりである。

第14表は西部ナイジェリア全体でみた農家の経営形態別、経営耕地面積別分布を示している。これをみると樹木作物栽培(ゴム、コーヒー、ココア等を含むが、西部ナイジェリアに関していえばココア栽培以外は大きく重要ではない)農

家がココア栽培をまったく行っていない農家よりも一般に規模が大きいことがわかる。このことはアプトン (M. Upton) の一事例調査結果とも一致する (第15表)。食糧作物が栽培されている耕作地面積は、各地域とも大きな違いがみられないのに、ココアベルト内のアラデ村とその他の村々とのココア畑面積を比較すると大きな違いがみられる。ココアの栽培をまったく行っていない農家は西部ナイジェリアの中では北部と南部に多く、ココア栽培農家は当然ココアベルト内に多いことを考えると、この調査が行なわれた60年代でもまだココアベルト以外の地域の人びとにとっては、ココア栽培農民は経済的に有利な立場にあり、ココア栽培はココアベルト以外の人びとにとって十分な魅力をもっていたといえる (第14表参照)。結局のところ北部ヨルバランドからココアベルトへの農民移住が長期にわたり発生した主たる原因は、自然条件によって北部ヨルバランドがココア生産の途を絶たれ、食糧作物生産への特化をよぎなくされていたこと、そしてこの地域の農民が現金稼得機会、土地生産性の点でココアベルトよりも不利であるという認識をもっていたことなどがあげられよう。

(4) 地域分化の例——アベオクタ地方【略】

(5) 地域分化の例——イジェブ、コロニー地方【略】

おわりに

以上、地域ごと (主として県レベルで) に明らかにしてきたココア栽培の増大と、それに伴う食糧生産の主たる担い手の形成 (ココアベルト内) と食糧移出地域の形成 (ココアベルト外) とを、西部ナイジェリア全体の中で把え直しておきたい。そして、“ココア生産の急速な増大にもかかわらず、西部ナイジェリア全体としては少なくとも60年代まで食糧を安定的に自給しえていた” の

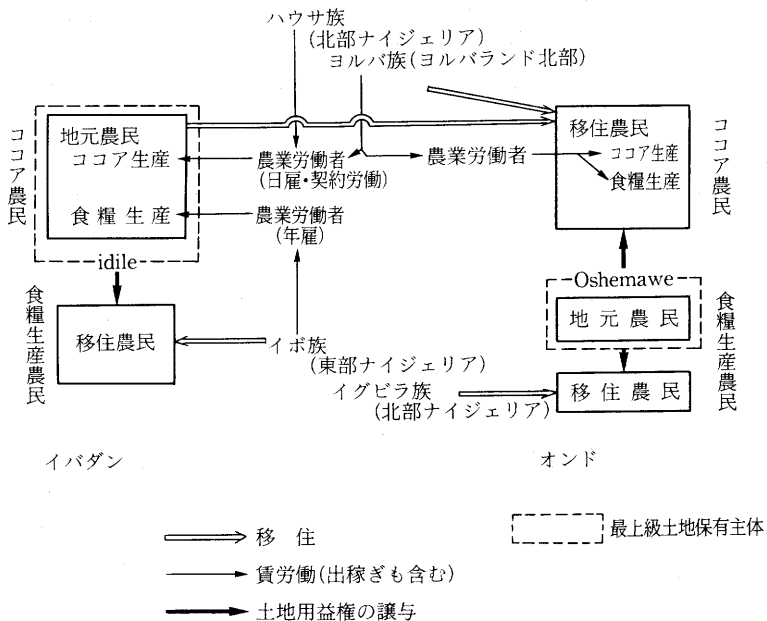
はなぜかといった問題に対しても、筆者なりの一定の解答を示しておきたい。

ココアが導入される以前の西部ナイジェリアでは一般に、耕作と休閑とを交互にくり返す叢林休閑耕作方法のもとでの食糧作物生産が行なわれていた。主な栽培作物は、ヤム、キャッサバ、メイズ、ココヤム等の食糧作物であった。この地域に19世紀後半にココアが導入され、1920～30年代にはすでにヨルバランドの広い地域にわたってココア栽培が行なわれるようになった。

ココアが導入されてココア畑の面積が拡大すると、ココアベルトでは、農業労働力と食糧に不足をきたした。このココアベルトにおける農業労働力と食糧の不足化を補ったのがココアベルト周辺部の食糧作物栽培地域、労働力供給地域であった。ココア栽培地域と非栽培地域との間の地域分化である。

ココアベルトの北側、北部ヨルバランドは農業労働力と食糧（主としてヤ

第12図 域内分業の概念図



ム、メイズ)の供給地となり、ココアベルトの西側のアベオクタ県はキャッサバとメイズの、そして南側のイジェブ県はキャッサバの主たる供給基地として、ココアベルトの周囲に有機的に編成された。

このような地域分化の傾向と並行して(もちろんこの地域分化と関連しつつ)ココアベルト内部では、ココア生産の比重を高める農民と、もっぱら食糧生産に従事する農民との間に、ゆるやかではあるが生産物の特化が進行した。この生産物の特化は、ココア生産の拡大過程に大きな影響を及ぼした各地域ごとの社会的歴史的背景のもとで、それぞれ異なる形をとった。本稿ではココア栽培の歴史が古いイバダン地方と、それが新しいオンド地方とを取りあげ、きわめて対照的な二つの型を描き出すことができた。第12図にその概念図を示しておく。

イバダンでは地元民がココア栽培農民となり、東部ナイジェリア出身のイボ族が食糧栽培農民となった。イボ族のくびとはヨルバランドでは社会的に不安定な地位におかれていたので生活上の安全が必要であった。このイボ族の弱い立場を利用して、イバダン地方のココア栽培農民は彼らを賃金水準の低い年雇で雇い、しかももっぱら食糧作物生産を行なわせた(ココア栽培を許さなかった)。一方地元のココア栽培農民も食糧生産を放棄したわけではなく、主として家族労働でこれを行ない、ココア栽培に必要な追加的労働力は、日雇や契約労働によってまかされた。

これに対しオンド地方では、北部ヨルバランドやイバダン地方からの移住農民がココア生産を行なっていた。これら移住ココア農民は、豊富に存在する未利用地と、同郷の若年労働力を利用することができた。豊富な土地と労働力が利用できるかぎり、移住ココア農民は食糧も自給できた。ココア栽培地の拡大によって食糧に一部不足をきたすことになったが、これも大きな量ではなかった。

このような地域分化と、ココアベルト内のゆるやかな分業(生産物の特化)は、西部ナイジェリアにおけるココア生産拡大に伴って起きた地域的社会的変容であった。と同時にこのような地域的社会的変容こそ、ココア生産の急

速な拡大と食糧生産の増大という二つの生産活動の両立を可能ならしめた構造的変化の内容であった。未利用地がますます少なくなり、人口も急速に増大しつづけるなかで、ココア生産を拡大し食糧生産も増大しえた理由の一つである。

【後略】

【注】

はじめに

- (1) 政府は、都市部と農村部との間の所得格差を縮小させるためにも、また都市部における食料品価格の高騰を抑えるためにも、食糧増産に力を注いでいる。昨年(1975)の4月ごろから新聞紙上(*Daily Times*, *Sunday Times*)でさかんに行なわれるようになった食糧増産キャンペーン“Operation feed the nation”も政府が後援している。

Daily Times, Lagos, 12 April 1976, 22 May 1976, およびそれ以降の同紙を参照。

一方農業問題研究者は早くからナイジェリアの農業生産の停滞を指摘してきた。そして現在では農業生産の停滞がナイジェリアの経済発展にとって最大の桎梏になっていること、さらにそれが都市—農村間の所得格差を増大し、いずれは大きな社会問題に発展する火種を抱えているという指摘がさかに行なわれている。たとえば、Olatunbosun, D., *Nigeria's Neglected Rural Majority*, Ibadan, Oxford Univ. Press, 1975, 175 p.を参照。

- (2) 伝統的土地保有制度の残存が、ナイジェリアの農業発展にとって大きな障害になっているとする意見は、ファモリヨやアデグボイエ氏などにみられる。ところで彼らが考えている土地改革は漸進的なものである。

Famoriyo, S., “Land Transaction and Agricultural Development in Nigeria,” *Eastern African Journal of Rural Development*, Vol. 7, Nos. 1 & 2(1974), pp. 177-188.

——, “Land Tenure and Food Production; An Analytical Exposition,” *West African Journal of Agricultural Economics*, Vol. 1, No. 1 (1972), pp. 239-253.

Adegboye, R.O., “The Need for Land Reform in Nigeria,” *The Nigerian Journal of Economic and Social Studies*, Vol. 9, No. 3 (1967), pp. 339-350.

また、ナイジェリアの農業生産拡大には、農業技術の改革や農業開発機構の再検討が必要であると考えるのは、オニ氏である。

Oni, S.A., “Increased Food Production through Agricultural Innovations

in Nigeria," *West African Journal of Agricultural Economics*, Vol. 1, No. 1 (1972), pp. 145-165.

- (3) 島田周平「南部ナイジェリアの食糧生産増大過程に関する一考察」(『アジア経済』第17巻第12号, 1976年12月) 32~52ページ。

I

- (1) 1967年の12州連邦制採用以前の西部ナイジェリア (Western Nigeria) を対象とする。12州制になってからの西部州 (Western State) と中西部州 (Mid-Western State) である。なお一昨年 (1976年) の2月に19州制に改められ、西部ナイジェリアは、オヨ (Oyo) 州, オグン (Ogun) 州, ラゴス (Lagos) 州, オンド (Ondo) 州, ベンデル (Bendel) 州の5州に分割された。ナイジェリアのココア生産の95%はこの西部ナイジェリアで行なわれている。
- (2) Oni, S.A., *op. cit.*, p. 146とFamoriyo, S., "Land Tenure and Food Production……," p. 239を参照。ところでナイジェリアの急速な食糧生産増大のメカニズムは、主としてland-surplus economy説によって説明されてきた。たとえばHelleiner, G.H., *Peasant Agriculture, Government, and Economic Growth in Nigeria*, Homewood, Richard D. Irwin, 1966, pp. 3-10, 44-55にこの考えが明確に示されている。同じ考え方はOluwasanmi, H.A., *Agriculture and Nigerian Economic Development*, Ibadan, Oxford Univ. Press, 1966, pp. 22-23, 48-52, 184-186にもみられる。

II

- (1) 調査は1951年に始められ1950年代末まで続けられた。このためここに示す土地利用状況は、大よそ50年代の姿を示すものと考えられる。
- (2) 16年戦争の終焉とイバダンにおけるココア栽培の開始との関係は、ベリーによって次のように説明されている。つまり職業戦士を多数抱えていたイバダンやイレシャでは、終戦とともに多数の若者が職を失い新しい雇用機会を求めている。そして彼らの中からココア栽培を開始する者が出てきたというのである。

Berry, S.S., *Cocoa, Custom, and Socio-economic Change in Rural Western Nigeria*, Oxford, Clarendon Press, 1975, pp. 51-53.

島田周平「ナイジェリアのココアベルト形成過程」(『アジア経済』第18巻第4号, 1977年4月) 55~70ページ。

- (3) Berry, S.S., *op. cit.*, pp. 16-17.
Mabogunje, Akin L., *Urbanization in Nigeria*, London, Univ. of London Press, 1968, pp. 186-191.
- (4) Berry, S.S., *op. cit.*, pp. 111-112およびp. 103.
- (5) Adejuwon, O., "Agricultural Areal Differentiation in the Cocoa Producing Areas of Western Nigeria," *The Journal of Tropical Geography*, Vol. 35

(1972), pp. 1-10.

島田周平「ナイジェリアのココアベルト……」(前掲誌)。

- (6) Lloyd, P.C., *Yoruba Land Law*, London, Oxford Univ. Press, 1962, pp. 98-100. Berry, S.S., *op. cit.*, p. 20.
- (7) ココアの木の植付けに際し、適正な間隔を保つことは収量を上げるうえで重要な意味をもっている。これまでの実験で最初の数年間は8フィート間隔ぐらゐに植え付け、植え付けてから数年後に一部を間引いて、間隔を12フィートから15フィートに保つような方法が長期的にみて、最大の収量をあげることが明らかにされている。イバダンでみられる3フィート間隔の植付けは、非常に狭いものと言わざるをえない。

Urquhart, D.H., *Cocoa*, London, Longmans, 1961, pp. 73-75.

- (8) Berry, S.S., *op. cit.*, pp. 92-94, 124.
- (9) *Ibid.*, pp. 72-76.
- (10) *Ibid.*, p. 78.
- (11) *Ibid.*, pp. 98-100. 「……このイシャコレ(土地用益権を借り受けている農民が土地所有者——家長である場合もあればリネージの長の場合もあり、さらには首長や王の場合もある——に対して毎年支払う一種の年貢)はしばしば自発的なものである。たとえばオロテド(Orotedo, オンド地方の村)ではほとんどの農民が(イシャコレの)支払いを拒否した。時々オシェマウェ(Oshemawe, オンドの王)は、オンド地方にいるすべての外来者からイシャコレを徴集することが彼の伝統的権利であると主張しようとしたが、このような試みには各農家が反対した」(カッコ内は引用者)。 *Ibid.*, p. 99.
- (12) オンド地方では土地の用益権しか持っていない農民が、自分が栽培しているココアの樹を他人に売却することさえしばしばみられた。これに対しイバダンやイフェ地方では、借地人によるココア栽培はもとよりココアの樹の売却に対しても土地保有者側は強く反対することが多かった。 *Ibid.*, pp. 102-104, Adegboye, R.O., "Farm Tenancy in Western Nigeria," *The Nigerian Journal of Economic and Social Studies*, Vol. 8, No. 3 (1966), pp. 441-453.
- (13) ココアは、年降水量50インチ以上必要でかつ高湿度を好む。土壌の点では砂質土壌をきらい重粘土質を好む。
- Morgan, W.B., "Agriculture in Southern Nigeria (Excluding the Cameroons)," *Economic Geography*, Vol. XXXV (1959), pp. 138-150.
- (14) Adegboye, R.O., *op. cit.*, p. 448.
- (15) Lloyd, P.C., *op. cit.*, pp. 139-140, 161.
- (16) *Ibid.*, pp. 156-159, 161.
- (17) Adegboye, R.O., *op. cit.*, p. 448.
- (18) イジェブ県の広い地域にわたってみられる(標高120m以下の地域の)酸性の

堆積土壌はココア栽培には適さない。この土壌は、短期的にはココアの成長にとって非常によい効果を示すが、早ければ15年以内に遅くても20年ぐらいでココアの樹は死んでしまうという。地表面の腐植土の厚さが非常に薄いのが原因である。

Galletti, R., Baldwin K.D.S. and Dina I.O., *Nigerian Cocoa Farmers: An Economic Survey of Yoruba Cocoa Farming Families*, Oxford, Oxford Univ. Press, 1956, pp. 17-19.

III

- (1) Uchendu, V.C., *The Igbo of Southeast Nigeria*, New York, Holt Rinehart and Winston, 1965, p. 25.
- (2) 島田周平「キャッサバの導入に関する一考察——東部ナイジェリアの例——」(『東北地理』第28巻第1号, 1976年1月) 24~32ページ。
- (3) これは軟質のflour typesである。硬質のflint typesは、ポルトガルからエジプトを経て、ずっと以前から西アフリカにも伝播していたとする説もある。

Miracle, M.P., *Maize in Tropical Africa*, London, Univ. of Wisconsin Press, 1966, pp. 87-91.

- (5) Galletti, R. et al., *op. cit.*, pp. 60-63.
- (6) Berry, S.S., *op. cit.*, pp. 169-170.
- (7) Güsten, R., *Studies in the Staple Food Economy of Western Nigeria*, München, Weltforum Verlag, 1968, pp. 181-182.
- (8) 地域間分業（あるいは地域分化）といった場合、われわれはイギリスにおいて18世紀（マニユファクチュア段階）にみられた、全国的規模での地域的分化を想起させられる。しかし、本稿で言う地域分化（regional differentiation）は、植民地下における地域間分業であり、自生的モデルとしてのイギリスにおける地域的分化とは性格が異なる。しかし西部ナイジェリアでみられた、ココアベルトの形成とその周辺地域の食糧基地化といった地域分化は、社会的分業発展の一形式であることに変わりはなく、ここでみられる地域分化の展開も、交換の発展、市場の拡大に対応している。詳しくは以下の文献を参照。

上野登『経済地理学への道標』大明堂, 1968年, 63~107ページ。

大河内暁男『近代イギリス経済史研究——国内市場の研究——』岩波書店, 1963年, 1~24ページ。

- (9) Green, L., "Migration, Urbanization, and National Development in Nigeria," S. Amin ed., *Modern Migrations in Western Africa*, London, Oxford Univ. Press, 1974, pp. 281-304.

Mabogunje, A.L., "Migration Policy and Regional Development in Nigeria," *The Nigerian Journal of Economic and Social Studies*, Vol. 12, No. 2 (1970), pp. 243-262.

- (10) *Ibid.*, p. 256を参照。

ここでは1952～63年の間の人口移動を、ココアベルト以外の地域からココアベルトへの、つまり周辺部 (periphery) から中心部 (core) への人口移動としてとらえている。しかし実際はベリーが明らかにしたように、ココアベルト内の都市イバダン、イフェ、イレシャなどから、東南方面のオンド農村部への移動が大きかった。

Berry, S.S., *op. cit.*, pp. 197-201.

- (11) *Ibid.*, pp. 40-45を参照。

さらに以下の引用も、移住農民によるココア栽培開始を想像させるものである。「オンドでは、よその土地から農民が移動してくるまで、土地用益権を得るための最初の支払 (initial payment: ヨルバ語でイシャギ *ishagi* と呼ばれ土地の用益権を得たときに土地保有者に対して土地用益者が支払う一種の礼金。ただし現金でなく物で支払われることもある) はほとんど行なわれなかったといわれている。というのはオンドの人はだれでも、誰の許可もなくオンド地方の未墾地を畑にすることができたからである。しかし、よそから来た人たちは、ココアを植える権利を得るために最初に現金を支払うこととイシャコレを支払うことを要求された」(カッコ内は引用者)。 *Ibid.*, p. 107.

- (12) Güsten, R., *op. cit.*, pp. 246～247. 総生産量のわずか2～4%しか市場に出されないという。ラゴス、イバダンへの食糧の移出入量も総生産量からみると非常に少ないものである。
- (13) アプトン (M. Upton) が行なったオンド県のアラデ (Alade) 村における調査でも、雇用労働力を利用している農家はすべて移住農業労働者を雇っていることがわかる。

雇用労働力の供給源

	イロファ村 (イロリン県)	アラデ村 (オンド県)	オルグボ村 (アベオク県)
地 元 民 (%)	100*	—	3
移住農業労働者 (%)	—	100	97
1日当り平均賃金 (シリング)	5.54	1.74	2.75

* 雇用労働力を利用している農民のうち何パーセントの農民が地元民を雇用しているかを示している。以下の数字も同様であり、すべてパーセント表示である。

(出所) Upton, M., *Agriculture in South-Western Nigeria: A Study of the Relationship between Production and Social Characteristics in Selected Villages*, Reading, University of Reading, 1967, p. 20, Table 2, 14.

- (14) アプトンは、雇用労働力として移住農業労働者を利用している地域ほど賃金

率が低いことを調査によって明らかにしたうえで（注⑬を参照）、その理由を、移住農業労働者が土地なし労働者であり彼らにとってはあらゆる雇用機会が魅力あるものである点をあげている。このため彼らは、自ら畑をもっている（主として地元の）農民よりも低い賃金率で働くというわけである。

Upton, M., *Agriculture in South-West Nigeria: A Study of the Relationship between Production and Social Characteristics in Selected Villages*, Reading, Univ. of Reading, 1967, pp. 20-21.

このアプトンの理解は、移住農業労働者＝土地なしの労働者という点に関するかぎり正しいが、それだから彼らは低い賃金率でも働くとする説明は必ずしも正しくない。移住農業労働者を雇う地域ほど賃金率が低いのは、ベリーが述べているように、移動農業労働者がいわばココア農民予備軍であり、彼らが同郷出身の先行ココア農民のもとで無償ないし安い手間賃で働くことが多いことも重要な理由の一つだからである。

Berry, S.S., *op. cit.*, pp. 72-76.

- (15) Hill, P., *The Migrant Cocoa-Farmers of Southern Ghana: A Study in Rural Capitalism*, London, Cambridge Univ. Press, 1963の第2, 第3章を参照。

山田秀雄「ガーナにおける伝統的社会経済構造の変容」（山田秀雄編『植民地社会の変容と国際関係』アジア経済研究所, 1969年）3～54ページ。

- (16) オンド地方における食糧価格のデーターは得られないが、前掲の第11図【略】に示したラゴスとイロリンにおける食糧価格の変動からも類推されるように、1920年代前半は西部ナイジェリア全般で食糧価格が高騰した（第11図【略】を参照）。
- (17) Adegboye, R.O., *op. cit.*, p. 450. なおイグビラ族の故郷は北部ナイジェリアのイロリン県（Ilorin Province）にある。彼らがヤムの栽培で他部族の農民よりも秀れていたのは施肥の点に関してのようである。ガレットィ他の前掲書の中に次のような記述がみられる。「オンド県にいたるイグビラ族の農民は（彼らは当然移住してきた農民たちである）、ヤム畑の畝に緑肥のすき込みを行なうが、ココア生産地域のたいていの農民は肥料などまったく使わない」（Galletti, R., et al., *op. cit.*, p. 217）。
- (18) ココア価格の暴落時にかえてココア栽培に乗り出す農民が多かったことを指してベリーはつむじ曲りな（perverse）経済行動と言っている。Berry, S. S., *op. cit.*, p. 82.

（島田周平／執筆時：アジア経済研究所調査研究部，現：立教大学文学部教授）